

「社会で生きる力」を 大学はどう育てているか

大学選びは“偏差値”から“マッチング”の時代へ。

ますます大学の教育の中身を見ておくことが重要です。

多くの大学が、社会で活躍する人材を輩出しようと

さまざまな改革に取り組んでいます。

わが子が伸びる大学は？

保護者の時代とは様変わりした、最新の事例に注目していきましょう。

教育ジャーナリストが最新解説
「今の大学の教育は、
保護者の時代とどう違うの？」 渡辺敦司……………p.30

変わる大学教育 最新事情 Trend of University

キャリア教育

| | |
|------------|------|
| 國學院大學…………… | p.32 |
| 明海大学…………… | p.34 |
| 明治大学…………… | p.36 |

新しい学び

| | |
|-----------------|------|
| 共立女子大学…………… | p.38 |
| 聖徳大学…………… | p.40 |
| 千葉商科大学…………… | p.42 |
| 山野美容芸術短期大学…………… | p.44 |

教えて！

「今の大学の教育は、 保護者の時代とどう違うの？」

大学進学という、つい入試ばかりに注目しがちになります。しかし、各大学で入学後にどのような教育を行い、学生にどのような力をつけさせようとしているかを知ること重要です。大学入試改革としての大学入学共通テストは今春から始まりましたが、実は、大学では2017年から、「三つの方針（ポリシー）」に基づく抜本的な教育改革が進行しています。保護者の時代とはすっかり様変わりした大学教育の姿は、いったいどうなっているのでしょうか。文部科学省の調査を基に、見ていきましょう。

教育ジャーナリスト **渡辺敦司**

教育専門誌を中心に、教育行政から実践まで幅広く取材・執筆。Webサイト「リクルート進学総研」に「教育トピック 教えて！」シリーズを連載。

「三つの方針」とは、▽卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシーⅡDP）▽教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシーⅡCP）▽入学者受け入れの方針（アドミッシヨン・ポリシーⅡAP）のことです。

順番が逆じゃないの？と思った方もいるかもしれませんが、実は、各大学が、社会に対してどんな人材を送り出すかをまず考え（DP）、そのカリキュラムと指導方法を工夫する（CP）、そうした各大学独自の教育にふさわしい入学生を選抜する（AP）、という考え方に基づいているのです。入学者の偏差値が高いほどいい教育ができる、という考え方とは、真逆の発想です。

実際、77.7%の大学が、「三つの

方針」の達成状況を点検・評価していると回答しました。そうした大学は、点検・評価の結果を受けて、教育を年々見直し、進歩させていくのです（14・15ページにも関連記事あり）。

受け身の姿勢は もう通用しない

では、具体的にどのような教育が展開されているのでしょうか。図1が、その具体的な取組の状況です。このうち「能動的学修（アクティブ・ラーニング、以下AL）」が特に注目です。高校では現在「主体的・対話的で深い学び」として取り組まれています。が、座学で漫然と一方的な講義を聞くのではなく、調査や討論、グループワーク、フィールドワークなど、能動

的な活動も取り入れて、専門的な知識を得るだけでなく、課題発見・解決能力やコミュニケーション能力など、社会で役立つ力も育もう、という形態です。

そんなALを「実際に行っている」大学は93.5%に上っています。それだけ必要な学習方法だ、と、ほとんどの大学が考えているわけです。さらに今後も、ALの授業科目の「増加を図る」とした大学が、71.9%もあります。受け身の姿勢で授業を受けることは、もう大学では許されません。

「履修系統図（カリキュラムマップ、カリキュラムチャート）」とか「ナンバリング」にも注目が必要です（図1参照）。DPに基づいてCPを具体化するために、4年間のカリキュラムを

効果的・効率的に編成していくというものです。

保護者の学生時代なら、必修科目のほかは自由に科目を選択し、卒業単位数を満たせばいい、という考え方もよかったです。しかしカリキュラム上、科目の履修の順番まできちんと決まっていれば、落としてもいい単位もなくなります。ひとつひとつの履修科目にそれぞれ真剣に取り組むことを通して、卒業時にはDPで期待されるような力がつく、というわけです。

最近、大学生が真面目に授業に出ている、という話を聞いたことはないでしょうか。こう聞くのも変な話ですが、保護者世代、というよりその上の世代では出欠を友達に頼む「代返」に頼り、後は一夜漬けの試験や

図1 カリキュラム編成上の工夫の具体的な取組

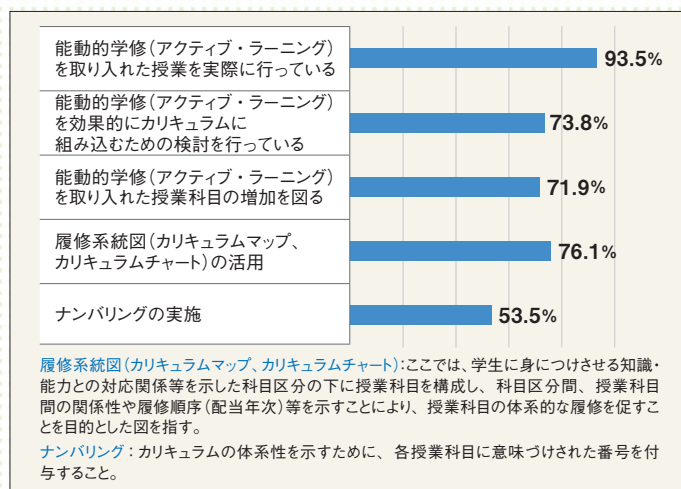


図2 教育課程内での「キャリア教育」の実施状況

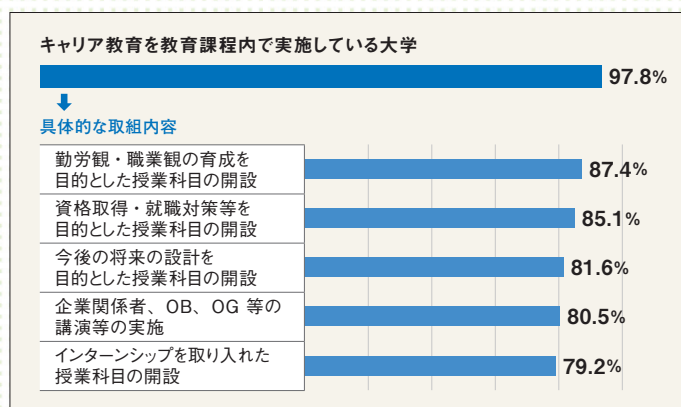


図1・2 本文内数値はすべて文部科学省「平成30年度の大学における教育内容等の改革状況調査結果」より抜粋

レポートでやり過ぎることが横行していました。もちろん今は、そうしたことは通用しません。団塊の世代の後、大学が「レジャーランド化した」と言われたのは、遠い昔です。バブルを経て、今や大学は本当の意味で「学びの場」に変化を遂げているのです。少し脅かしすぎたかもしれませんが、でも、大丈夫です。大学の方でも「初年次教育」という、入ったての学生に、大学ならではの学び方を身につけさせる教育を、多くの大学が工夫しています。特に、プレゼンテーションやディスカッションの技法を身につ

けたり、論理的思考や問題発見・解決能力の向上を図ったりすることは、社会でも必要な能力であり、各授業のA.Lで鍛えられることを通して、卒業時には即戦力として通用する力にまで高めることが期待されています。

「キャリア教育」も4年間の学修と関連

なかでも社会に直結する学修が「キャリア教育」です。

図2を見ると、「企業関係者、OB、OG等の講演等の実施」など、単位を取

OG等の講演等の実施」などだけでなく、「勤労観・職業観の育成を目的とした授業科目の開設」「今後の将来の設計を目的とした授業科目の開設」「インターンシップを取り入れた授業科目の開設」など、単位を取得させる正式な授業として開設している大学が多いことに気がつくでしょう。

これも昔は、学業と学問と就職活動が別物と考えられていた向きが強かったように思います。しかし今は、4年間の「学修」を通して、職業に直結する専門的知識はもとより、社会的・職業的自立や、社会・職業への円滑な移行に必要な力を育成することが目指されています。

インターンシップも、同じことです。「就職に有利だから参加する」といった意識では、伸びる力も伸びません。

英語力育成や交流協定は当たり前

グローバル人材の育成も、大学の大きな課題です。世界的な研究大学にとどまりません。地域人材の輩出を担う大学にとっても、人的にも物的にも世界とつながって地域を発展させることが課題であり、そのためにも大学が、地域における「知の拠点」となることが求められています。

英語教育でネイティブ・スピーカーを活用している大学は80.9%、能力別クラス編成を実施している大学は74.2%を占めます。会話中心や速読中心などの目的別クラス編成も52.2%の大学が行っています。英語について、さまざまな外部試験のスコア等を到達水準の一つとして設定している大学は25.8%ですが、その多くが留学などを視野に入れているものとみられます。

グローバル化対応という点では、国内大学でありながら、外国語のみによる授業を実施する大学も近年増加傾向にあります。また海外と大学間交流協定を締結している大学は、87.8%に広がっています。とりわけ協定先がアジア地域の大学である大学が82.8%に上ることも注目されます。

今後、グローバル化対応が求められるのは、企業の規模、産業あるいは地域を問いません。国内外を問わずグローバルに活躍できる人材を育成する役割も、全国に800校近くある大学に期待されているのです。

高校は、そんな大学に進むための基礎を培う場でもあります。単に入試をパスすることだけではなく、高校で培った力を大学でさらに伸ばして社会で活躍できることを目指してほしいと思います。

※「学修」:単位を取るには、授業と同じ時間を予習と復習に充てる必要がある、という考え方に基づくもの。高校の「学習」とは考え方が異なる。